

【特集：「加藤弘之著『中国経済学入門』との対話」  
【寄稿】

## 晩年の加藤弘之教授と『中国経済学入門』

梶谷 懐

2016年8月30日、加藤弘之教授が亡くなられた。61歳の誕生日を目前にした早すぎる死であり、その訃報に接した時、急なことで驚かれた方も多くおられたかもしれない。しかし、ゼミなどで日常的に接している私たちにとっては、加藤教授の病状が少しずつ進行していることは明らかだった。そのことは、病気の影響から声帯や口の周りが麻痺し、聞きなれた「声」が若干音のこもったような独特の聞きづらさをもって発せられることを通じて、実際にお目にかかったことのある方々にも伝わったことと思う。晩年、病気の進行に伴い発声が一層困難になった加藤教授はゼミや研究会の席では文書読み上げソフト「詠太」を使うようになり、女性の機械的な「声」を通じてその発言を聞く、というのが私たちの習慣になっていた。ゼミで大学院生が報告を終わり、一通り質疑応答が行われている間に、教授のカチャカチャと忙しくキーボードを打つ音が聞こえる。キーボードの音がやむと、そろそろだな、と思って発言を待つ、といった具合である。

さて、晩年の加藤教授は、現代中国経済の現状をフィールドワークや統計データによって実証的に把握する仕事を精力的に続けながら、次第に「中国経済の独自性」を自分なりの方法論で描き出す、という課題の追求を、自らのライフワークとして明確に位置付けるようになっていった。その一つのきっかけとなったのが、外務省と神戸大学との交換人事により1年間、日本大使館の公使として北京に赴任し、「日本人として中国とどう向き合うべきか」という課題

により実践的なレベルで向き合う経験をされたことではなかっただろうか。それに加え、自らの健康状態が次第に悪化する中で、残された時間の中でどのように、自らの他人にはまねできない独自の研究を完成させていくのか、その課題に切実に向き合わざるを得なかったという事情もあったように思う。

「中国経済の独自性」の追求、といったとき、まず触れなければならないのが、日本における中国研究の先人たちの遺産をいかに吸収し、継承するか、という課題である。加藤教授は、故・村松祐次や故・柏佑賢といった戦前の中国研究の遺産を受け継ぎつつ戦後の中国研究に大きな足跡を残した先駆者による古典的著作を読み込み、中国経済の安定なき停滞、「包」の経済倫理といった当時の中国経済の特徴を表すキーワードを再発見し、現代的な光をあてていった。さらには、故・青木昌彦らによる比較経済制度分析研究など、現代経済学の成果を積極的に取り入れながら、戦前から現代までを貫く中国経済の制度的な特徴を独自の概念的枠組みでとらえるという課題に最後まで取り組み続けた。

村松や柏の中国研究に対する積極的な評価は、加藤教授が研究者としてのキャリアを築き始めた1980年代が、戦後の中国研究で支配的であった段階論的、単線的なパラダイムの限界が明らかになり、むしろ戦前の類型論的なパラダイムが見直され始めた時期に重なる、という事情とも無関係ではないだろう。確かに戦前の中国研究は、当時の中国社会と、欧米や日本社会との「異質性」を強調するあまり、その近代化へ

の歩みを正當に評価できなかつた、という側面を持っていた。そのような「中国特殊論」「中国停滞論」が、日本の對外膨張的な大陸政策と結びついていったことへの痛切な反省から、戦後の革新陣営ならびにその影響を色濃く受けた一部の中国研究者の間では、村松・柏に代表される、「中国経済の独自性」を類型論的に論じる研究は、長らく異端視されてきた。その一方で、1980年代には、文革による激しいイデオロギー的対立を経て、政治的イデオロギーに強く規定されてきた中国研究のあり方を見直す動きも生じていた。加藤教授による戦前のパラダイムを引き継ぐ研究者への強い関心は、こういった1980年代以降における、中国研究そのもののあり方の変化と切り離して語ることはできないように思われる。

さて、加藤教授がその著作の中で、「中国経済の独自性」の追及、という課題に正面から取り組み始めたのは、久保亨氏との共著である『進化する中国の資本主義（叢書 中国的問題群5）』（岩波書店、2009年）からだといつてよいだろう。出版元である岩波書店のウェブサイトには、同書について以下のような紹介文が掲載されている。「改革開放後、急成長を遂げた中国。その資本主義市場経済は欧米や日本の資本主義とどこが同じでどこが異なるのか。中国の独自性はいずれ消滅し欧米型資本主義と同じものになっていくのか。中国型資本主義として独自の発展を遂げるのか。市場の秩序のあり方と政府の役割に焦点を当てて、中国資本主義のゆくえを考察する」。ここには、共著ということもあって「中国の独自性はいずれ消滅し欧米型資本主義と同じものになっていくのか。中国型資本主義として独自の発展を遂げるのか」と結論を曖昧にした疑問形で示されているが、その後の歩みを見れば、この「問い」に関する加藤教授の結論は明確であった。すなわち、「いかに経済発展が進もうとも、中国経済の独自性が消滅し、欧米型資本主義と同じものになっていくようなことはないだろう」。これが、加藤教授がその研究生活の最後にたどりついた命題

であった。

その姿勢は、2013年に出版された、『「曖昧な制度」としての中国型資本主義』（NTT出版）においてより一層明確にされる。そのことは、同書の「あとがき」における、以下のような文章を見れば明らかであろう。

日本料理には日本料理の良さが、中華料理には中華料理の良さがあり、甲乙つけがたいというのが客観的評価だろう。日本人はどちらかといえば素材の味を引き立てるような味付けを好むが、中国人の嗜好はその対極である。中華料理の「うまみ」に相当するものが、本書で追及しようとした「曖昧さ」なのである。

そして、最晩年に発表された『中国経済学入門』（2016年、名古屋大学出版会）は、腐敗・格差問題、土地所有制度、イノベーション、対外援助など、現代中国経済におけるさまざまな現象を、上記の「曖昧な制度」という概念的枠組みを用いて縦横に分析した点が高く評価され、2016年のアジア太平洋賞特別賞を受賞した。本書の特徴は、不確実性に満ちた中国における資本主義のダイナミズムの源泉を、市場経済取引を支える「制度の曖昧さ」としてとらえた点にある。特に注目されているのが、前述の「包」の倫理規律という概念である。

農家と村の間の、あるいは上級政府と下級政府の間の請負は、改革開放後の中国経済の活性化に大きく貢献した。また、「山寨携帯」の生産にみられる零細業者同士の分業・協力のネットワークも、「包」的な関係の連鎖として捉えることができる。同書は、このようにして「包」に代表される中国の「曖昧な制度」が、グローバル経済の変動がもたらすリスクに対してある種の柔軟性と意外な強靭さを持っていることを積極的に評価し、それこそが「中国経済の独自性」を形成するコアの部分であることを高らかに宣言した。

同書は、その大胆な構想ゆえに、加藤教授の逝去後も白熱した議論を巻き起こした。例えば

2016年10月16日には、神戸大学で開催されたシンポジウム「地域大国としてのBRICs」の中国セッションとして、朴一氏および絵所秀紀氏による書評報告が行われた。また、同年11月6日には、加藤教授の追悼企画「加藤弘之『中国経済学入門』との対話」が中国経済経営学会・アジア政経学会・日本現代中国学会の共催として慶應義塾大学で開催され、2時間半にわたり活発な議論が行われた。

本特集に掲載された中兼論文、菱田論文、川端論文は、いずれも慶應義塾大学でのセッション「加藤弘之『中国経済学入門』との対話」における書評報告を基にしたものである。同セッションにおける毛里和子氏の書評報告、および10月の神戸大学のセッションにおける朴氏、絵所氏の書評報告を基にした論文は、丸川知雄氏による書評論文と共にアジア政経学会の学会誌『アジア研究』に掲載される予定である。「曖昧な制度」という概念や、その個別の事例へのあてはめの妥当性への疑義に始まり、「包」に代表される「中国独自」とされる現象は、経済発展の過程における過渡的なものに過ぎないのではないか、あるいは制度の「曖昧さ」は日本や他のアジア諸国にもみられるのではないかなどといった同書の枠組みに対する根本的な批

判まで、多岐にわたる論点がこれらの論考からは提起されている。著者が急逝した、という事情を差し引いても、中国経済に関する書籍がこれだけ多くの研究者による多様な議論を惹起する、ということは極めてまれであり、同書が投げかけた問いの大きさを改めて示すものだと言えよう。

言うまでもなく、これらの批判や議論に対して加藤教授がどのように応答するのか、それ聞くすがもはやないことが、かえすがえすも残念でならない。国際的に標準化されたディシプリンの下で書かれた英文の業績を、著名なジャーナルに掲載していくことが優先される日本のアカデミズムの状況において、加藤教授が最後まで取り組んだ、個別実証研究にとどまらない、「日本人でしかできない創造的な中国研究」を追求するという道は、ますます困難なものになっていくだろう。しかし、だからこそ後に残された私たちは、加藤教授が『中国経済学入門』を通じて投げかけた問いを、これからどのような形で受け継いでいけばいいのか、改めて時間をかけて問い直す必要があるのではないだろうか。

(かじたに・かい 神戸大学)